

剣道範士小川忠太郎先生 道人の生涯 (二)

長野 善光

六 剣禅一味

先生が私達に身をもって伝授下さった古流の形は、一刀流・無刀流・直心影流（法定）であるが、その一本一本の^{りあい}理合の説明の中には、誰も過去に語られたことのない先生独特の剣禅一味の教えが湧出する。曰く「古流の形の稽古をすると剣禅一致が分る。」と。また曰く「相手に対すると誰でも打とうという欲が出る。その欲は自己から来る。この自己を殺す。ここを修行する。だから剣道は禅と一致する。」と。

また次のように語られたことがある。「正受老人の【一大事と申すは今日只今の心也。】これは^{すご}凄いね。現在になりきる。これは剣道の極意だ。」と。

先生は小野派一刀流第十六代笹森順造先生より免許皆伝を得ておられ、無刀流は第五世石田和外先生に学ばれ、直心影流（法定）は満蒙開拓義勇軍を組織された加藤完治先生に師事されている。この3人の先生方は、剣道修行の外にそれぞれ世の中に大きく貢献された立派な方々であるが、禅道仏法においてはその^{うんのう}蘊奥を究めてはおられない。従って剣禅一味の妙境を如実に体得され、それを日常に活用されるときともに深く味わっておられたのは、現代では先生が第一人者であったのではなからうか。

剣道の専門家としての先生は、古流の伝書を広くかつ深く研究され、私達に折にふれ話をされたが、それは皆剣と禅の修行をされた先覚者の教えであった。歴史に残る各流派の創始者と禅門とのかかわりを示せば、宮本武蔵（二天一流）は春山和尚につき、柳生宗矩（柳生流）は澤庵和尚につき、針谷夕雲（夕雲流）は虎伯和尚につき、寺田五郎衛門（天真一刀流）は東嶺和尚に参じ、山岡鉄舟（無刀流）は滴水禅師の印可を得ている。

先生の引用された語録の多くは、宮本武蔵の『五輪の書』であり、澤庵和尚が柳生宗矩に与えた『不動智神妙録』であり、山岡鉄舟居士が愛蔵されたという『猫の妙術』等々であった。

先生が実技を指導される場合にも、禅を土台とした独特の説き方をされるのが常であった。

剣道は全身全霊を込めた、ほんとうの一本、命を懸けたほんとうの一本を出すようにする。それを切り落して練る。一刀流ならこう。無刀流ならこう。

相手を認めるといことは自己があるからだ。自己を殺し尽くす。そして相手と一枚になる。これを「両鏡相照す」という。

剣道で「乗る」というのは、機先を制することであり、禅門でいう処の「随所に主となる」ことである。今の言葉で言えば主体性を失わないことである。しかしこれは自他が一枚にならないとできない。どんな問題でも「受け身」になったらいけない。乗っていくんだ。

「乗る」ことを「転ずる」という。転ずれば、どんなことだって自主的だから苦しくない。どんな問題でも現在しかない。明日の問題が今来たりはしない。だから現在に乗っていく。「現在」、「この場」しかない。これが剣道だ。この修行だからためになる。

19歳の時、陸軍幼年学校へ稽古の指導に行つて、徹底的に苦しめられた体験によって体得されたことは、どんな場合でも「受け身」に

なっではいけないということであると言われている。

国土館時代、何かを求める気持で1週間断食して稽古されたり、寒中松陰神社で一晩中素振りをされたりして得られた結論は、難行苦行では何も得られないということであったと言われる。

今でも難行苦行さえすれば解決すると思っている人がいるが、難行苦行じゃ解決しない。人間禅教団の教えが正しい。【神秘を語らず迷信を説かず】これが本当だ。

発する前に一念が迷い出すから対立になる。ここを工夫するには禅が早い。

直心影流法定之形は、正念相続の修行である。

七 警視庁時代

昭和28年先生は、かねてより肝胆相照す間柄であった石田和外先生（後の最高裁長官。人間禅教団賛助員）の御尽力と、斉村先生の御推挙により警視庁剣道師範に就任された。

警視庁の剣道師範とは、助教（六・七段）に稽古をつけ、指導する立場であるが、この助教の人達は毎日警察署等で署員に稽古をつけており、いうなれば剣道で飯を食っているプロの人達である。だからこれは大力量の人でなければ務まらない。しかも外部から師範として入られた先生には、風当たりが相当強かったと思われる。

御令室様は、こうお話になった。「主人は常に竹刀を真剣と思って使えと申しておりましたが、警視庁に入った時は、毎日がほんとうに真剣勝負であったと思いますよ。それでいていつもと同じように平然としておりました。」と。戦後10年近く本格的稽古をする機会がなく、多少の不安を持っておられたためか、後年私にはこう語られた。「初日やって見ると、どうにか役目を果たすことができた。これならやれると自信を持った。」と。これは全く先生の禅定力のなせるものと拝察した次第である。

警視庁でも一切他所との兼任はされず、警視庁の稽古一筋に全力を尽くされ、また坐禅のほか一刀流・直心影流を導入されて正しい剣道の指導に精魂を傾けられた。後に宏道会員も古流の稽古を通じて、警視庁の先生方に接する機会を得ることができ、大変勉強になった。

昭和39年から3年間は武道専科生の指導を担当され、その身体を張っての稽古ぶりには専科生一同感銘を深くしたという。例えば誰にでもどんどん面を打たせ、加減をされることはなかった。日頃から「弟子の養成は親心で」と話されており、それを如実に実行しておられたのである。帰寂された後火葬場でのお骨拾いの時、警視庁のある人が先生の頭蓋を拝しながら「よく打たせてもらったなあ。」と嘆息していたが、皆心底同じ思いであった。

長らく警視總監の任にあった土田先生は、元両忘協会々員の野口極観居士（旧制二高校長・お茶の水女子大学長）の娘婿で、後に防衛大学校長になられた方である。後年過激派による小包爆弾で死亡されたのが土田夫人である。防大の稽古に行った時、土田学長にお会いして先生のことを申し上げると「よく稽古をしていただいた。心から尊敬しております。」とのお言葉であった。先生も土田先生のことを「最近珍しい立派なお方だ。」と評しておられた。お互いに肝胆相通するものがあったように拝察された。



小川先生の演武（宏道会剣道場にて）

先生はこうして周囲の信頼を一身に集められ、遂に警視庁剣道指導室主席師範に就任され、その重責を双肩に担われた。そしてその大任を全うされ、昭和45年18年間勤務された警視庁を退任され、同時に名誉師範となられたのである。

八 宏道会の指導

昭和31年、佐瀬孤唱居士、後の妙峰庵佐瀬孤唱老師によって宏道会が創立されるや、先生はその最高師範に就任された。これは宏道会の子供達にほんとうの剣道を教えてやってほしいという、教団総裁耕雲庵老師の御希望によるものであった。

先生の御指導は、一刀流組太刀・切返し・掛り稽古が中心で、特に基本を大切にされた。警視庁を退職された頃より、ほぼ月に4回位宏道会にお見えになり、次第に本格的な稽古を御指導いただくようになった。古流も、一刀流に直心影流法定之形の稽古が加わり、特に古参の者には地稽古が許された。

先生曰く「切返しは坐禅における教息観である。切返しに数をかけて三昧力を養うことが剣道の土台である。それなくして打合いをしても剣道にならない。ほんとうの三昧力は人生に役立つ。」と。

また地稽古は、一刀流の形の応用として行うものであるとの立場から、稽古の後の個人指導では「こういう場合は一刀流の形の何本目を使えばよい。」と、一刀流組太刀を規範として御指導下さるのが常であった。

こうして次第に宏道会流の剣道が造り上げられていった。例えば、3尺2～4寸の短い竹刀を使用し、反復切返し・双手突き・遠間からの捨身の太技の面打ち等である。

宏道会で話されることは、すべて剣禅一味の御境涯から出たもので、このようなお話は剣道界^{いえど}広しと雖も、他に例を見ないものであった。

その語録の一部をご紹介します。

剣禅の両輪で真心の井戸を掘り起こせ！ そうすれば、人がそれを飲むことができる。

剣道は相手と一枚になる修行である。相手と一枚になっておれば、受けるのではなく応ずることができる。形はすべて応ずるのであり、応じた時は必ず打っている。これが正しい。

ある時、外部から七段の先生が入門を願い出た。それに対して、先生はこうお話になった。「剣道修行の目的は、自分が死ぬということである。自己を殺すということをしてしないで、相手を打とうとするのは間違いである。それには古流の形がよいから、古流の形の稽古をしっかりとやって下さい。」と。

剣道は正眼に構えたままで迷いを生じさせないようにする。これが究極である。二念をつがず。

剣道はいつでも先^{せん}になっていなければならない。そのためには、自分が充実していること。気分がいっぱいになっていなければならない。これには禅が一番早い。

21世紀の剣道は、相手に動かされない^{はら}肚を練るものでなければいけない。

ある会員が問うた。「生きる目標如何？」先生答えて曰く「正念相続。」と。

九 剣道界への貢献

先生は警視庁を退職されると同時に、全日本剣道連盟の審議員を委嘱されておられる。すでに先生の剣名は高く、特にそのお人柄・剣風・古流に対する深い御造詣^{ぞうけい}に加えるに、永年禅の修行によって培われた高潔な御人徳は、真の剣道家として多くの人々から尊敬を集めておられた。従って先生が全剣連の役員に就任されなくても、先生がほんとうの剣道を求め、捨身で精進されたお姿こそ、剣道界に対する何よ

りの貢献であった。

戦後復活した剣道は次第に流行し、剣道人口700万人といわれ、数の上では史上最高を記録したが、戦後のブランクによる指導者不足や試合中心のため、その本質を見失い、勝敗にとらわれ、当てることを目的としたスポーツ化の現象がひどくなってきた。心ある人は、これは日本古来の正しい剣道ではない、早くこの悪習を除去して、自分の心を練るほんとうの剣道に戻さねばならないと真剣に考慮するようになった。

そこで全剣連では、昭和50年に『剣道の理念及び剣道修練の心構えについて』を制定し、全国に通達してその改善を図ることにした。先生は理念委員としてこの制定に参画され、^{ひっせい}畢生の努力を傾注された。それは次に掲げる「剣道の理念」を見れば一目瞭然である。

【剣道は、剣の理法の修練による人間形成の道である。】

申すまでもなく、この「人間形成」という一語を入れられたのは、先生である。しかしこの理念が制定されたからといって、邪道に入った剣道が簡単に正道に戻るものではない。先生はこれより以後、「剣道の理念」の実際化のため東奔西走され、各地で講演会・講習会を開催され、求めに応じて剣道雑誌等にも投稿され、その普及に^{こんしん}渾身の努力をされている。

その甲斐あってか、制定後約15年を経て^{ようや}漸く剣道界にも、「剣道の理念」の方針に沿って進まねばならないという空気が醸^{じょうせい}成されてきた。

それをある時先生から直接お聞きすることができた。「最近では全剣連の指導理念によらないといけないという声が出てきた。よい傾向だ。」と。

自ら正しい剣道を行じ、多くの剣道愛好家にその模範を示されるとともに、剣道修行の正しい方向を示された御功績は、絶大なものというべきである。先生は、剣道界刷新のために全身全霊を尽くされ、今

やっとその成果が出ようとする時に帰寂されたのである。しかし日頃私達に話されていた「正しいことを突き抜いていくこと程、楽しいことではない。」のお言葉のとおり御満足であられたように拝するのである。

十 晩 年

先生は、70歳過ぎから耳が遠くなられ、80歳過ぎにはほとんど聞こえなくなれたが、大変お元気で、お話などお声も大きく気合の入った張りのあるもので、お聞きしていても全く年齢を感じさせられることはなかった。

ただ、お若い時の無茶な稽古の後遺症として、右半身の血行が悪く、持病となって若干難儀をしておられた。それ以外にはお悪い処はなく、稽古の上でも七段・八段の先生方を相手に立派な指導をされていた。

喜寿を迎えられた頃に次のようなお言葉があった。「私はこうして稽古ができるのは、毎日坐禅を組んでいるからだ。以前は毎日1炷^{ちゆうこう}香（1時間）坐っていたが、それでは最近稽古ができなくなった。それで毎日2炷香（2時間）坐ることにした。そうすると稽古ができるようになった。」と。

宏道会では、会員の上達を楽しみにしておられたが、米寿を過ぎた頃よりお身体全体が弱られたからということで、昭和63年の秋からお見えにならなくなった。それでも、東京九段の日本武道館・野間道場・警視庁等へは時折出かけられ、また水戸市内原町にある日本農業実践学園で行われている日本武道修練会（直心影流法定之形修練会。年1回。3日間）には、平成2年8月（満89歳）まで欠かさず出席されていた。

御令室様は、こう語られている。「宏道会には、ほんとに一生懸命のようでした。市川から帰ってきますと、今日の稽古は気待のよい稽古であったと、いつも喜んでおりました。」

その宏道会の創立35周年記念式典が、平成3年9月に教団本部道場で開催された。先生には御体調すぐれず御自宅で御静養の処、これが今生最後ということで御無理をして出席され、会員一同に今後の修行目標を示された後、出席者全員に別れの挨拶をされた。

10月には一段と弱られ、11月11日には一時危険な状況もありであったが、無事平成4年の正月を迎えられ、大変喜ばれたという。例年どおり御家族に年頭の訓辞を述べられた後、先生曰く「今年は口では言わない。身体で示す。」と。

1月11日お見舞に参上し、約1時間、椅子に厳然と腰かけられた先生と対面しいろいろ御高説を承わったが、これが最後のお別れとなった。その時先生は「今でも毎日30分坐っている。これが支えになっている。坐禅はまことに素晴らしい。よくこのようなものが発明されたものだ。身体の苦痛は数息観で乗り切っている。」とお話になった。

こうして先生は1月24日まで、御家族の介添えを得ながら坐禅を続けられた。先生に付ききりでお世話をされた次女の道子様は、こう語られている。「病状が、進み相当苦しいはずでありますのに、一度も苦しいと言わず、楽しい楽しいと申しておりました。」と。1月22日には辞世を詠まれたが、27日からは食べ物を一切断たれ、遂に29日午前11時55分御自宅において、御家族の見守られる中、眠るが如く静かに息を引き取られた。

先生辞世の和歌

我が胸に 剣道理念抱きしめて
死に行く今日ぞ 楽しかりける

御令室様和歌

白雪の 舞に送られ志づしづと
逝きて帰らぬ 浄土への旅

こうして剣禅一味の妙境を究められた不世出の道人は、年頭の御家族への御垂戒どおり、全身をもって大説法を行ぜられ、その行道の大生涯を閉じられたのである。

合掌
(完)



剣道理念を語る小川先生(平成3年)

著者プロフィール



長野善光（本名 / 拓郎）

昭和2年、愛媛県生まれ。中央大学卒業。元平田倉庫（株）専務取締役。昭和24年、人間禅立田英山老師に入門。人間禅師家。庵号/實鏡庵。昭和26年、小川忠太郎先生に入門。宏道会離位。同会師範。小野派一刀流免許皆伝。平成17年帰寂。